

2. 舞鶴市の歴史文化

2-1. 舞鶴市の自然環境・社会環境

（1）自然環境

ア. 位置および地勢・土地利用等

舞鶴市は、京都府の北部に位置して、北は日本海（若狭湾）に面し、東は福井県高浜町、南は綾部市と

福知山市、西は宮津市と接している。その面積は342.12km²で、京都府の約7.4%を占め、東西29.7km、南北24.9km、海岸線は119.9kmにおよぶ。また、オオミズナギドリ繁殖地として国の天然記念物に指定されている冠島や沓島などの島々も舞鶴市に属している。

舞鶴市の市街地は大きく2つに分かれており、田辺藩の城下町・商港から発展した西地区、海軍の軍港から発展した東地区と両地区とも特徴的な市街地を形成している。その他にも地勢的に中地区、加佐地区、大浦地区の5地区で構成される。

また、日本海海運が発達した江戸・明治時代には、神崎、田辺、市場などに湊をもち、北前船の寄港地として日本海海運の一翼を担い、北海道・東北と大阪を結ぶ海の交通の要衝であった。

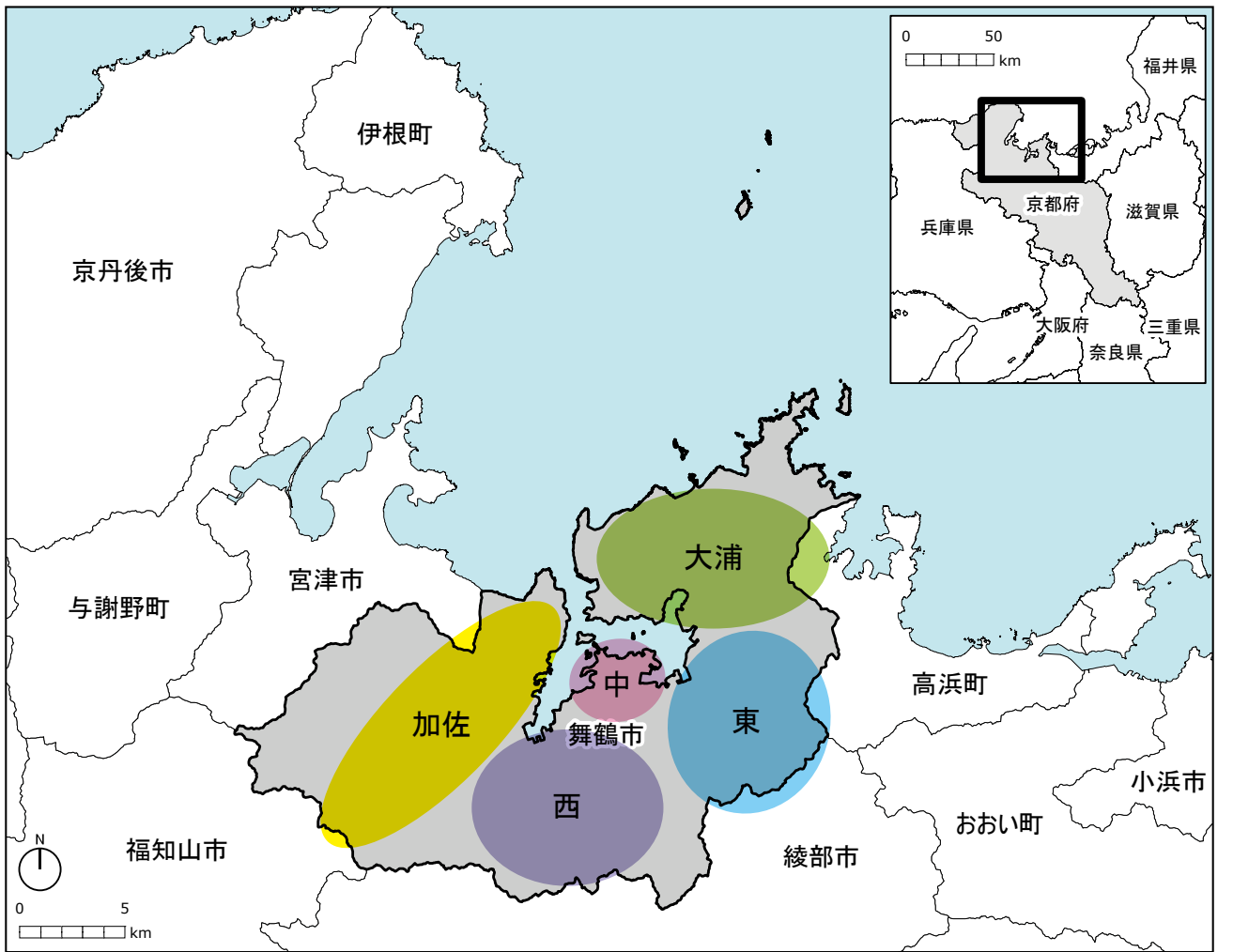


図 2-1 舞鶴市の位置

市域の大部分は老年期の山地や丘陵によって占められ、平野は由良川河畔の堆積面、西地区の高野川、伊佐津川、東地区の与保呂川、志楽川の沖積地が発達しているが平地面積は少ない。

市域の大半を占める山林地域のうち、舞鶴市を代表する山岳としては青葉山があげられる。青葉山は標高699mの秀峰で、大山、氷ノ山とともに山陰地方における高山植物の三大宝庫のひとつに数えられ、若狭富士とも呼ばれている。また、青葉山は由良ヶ岳、弥仙山とともに親しまれている。市域の山岳は600m前後が主体となり、青葉山に加え、宇野ヶ岳(694m)、赤岩山(669m)、弥仙山(664m)、三国岳(616m)、槇山(483m)、五老岳(301m)が主な山岳としてあげられる。

一方、舞鶴市西部を流下する由良川は全長約146kmの京都府下最大の河川で、福知山市から舞鶴市にかけての地域は勾配がゆるやかなため、古くから幾度となく洪水にみまわれた。しかし、由良川下流域の桑飼上遺跡や桑飼下遺跡、志高遺跡などは、古代から現在まで、大河川である由良川と折り合いながら、数々の災害にあっても力強く生活していた人々の姿を彷彿させる。

また、西地区を流下する伊佐津川などの国管理一級河川のほか、与保呂川、志楽川などの府管理二級河川が市内を流下している。

このように、舞鶴市は河川の河口部に位置して舞鶴湾に面し、四周を山岳・丘陵部で取り囲むような地形的特徴を有し、海、川、山の自然環境を活かしながら、湾奥部に市街地が発達してきた都市であるといえる。

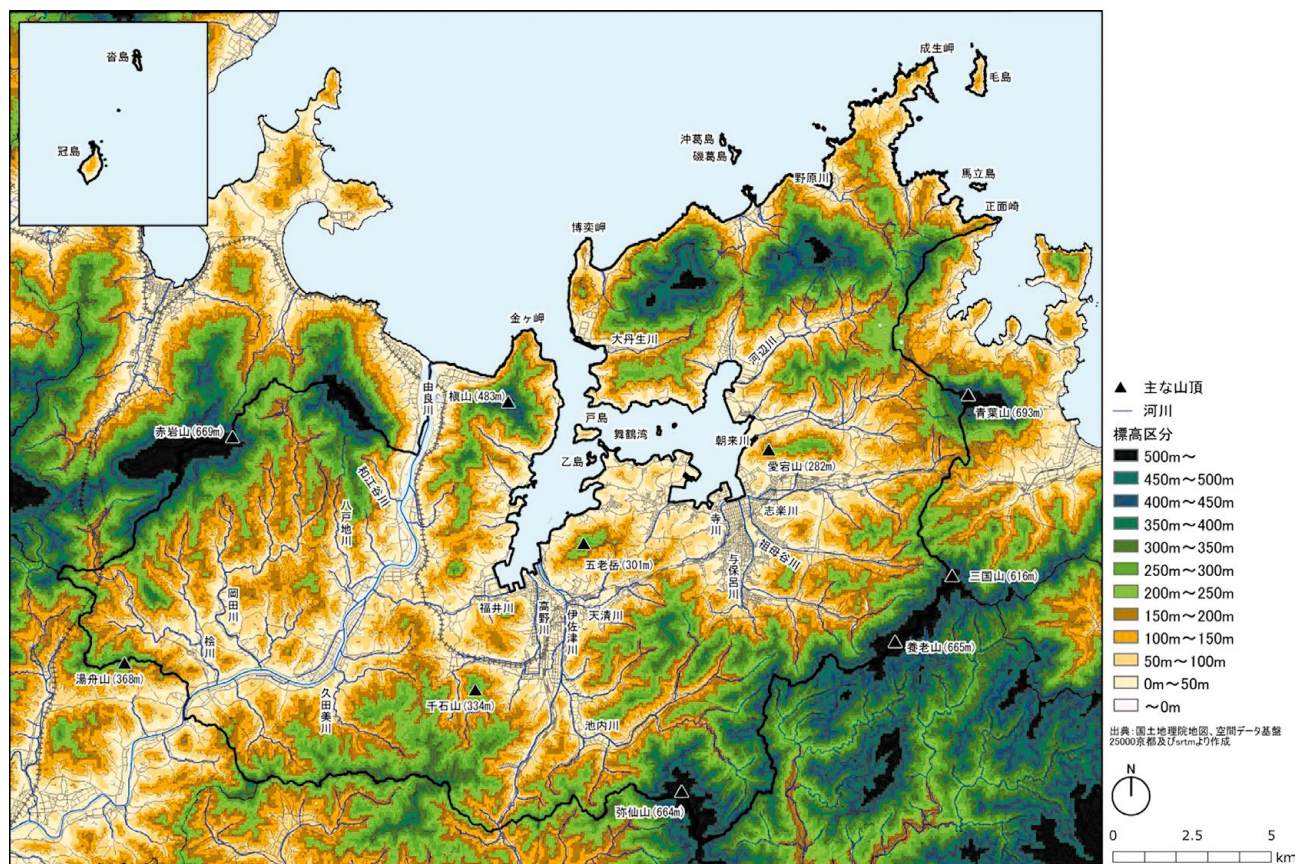
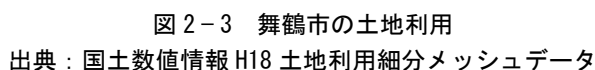
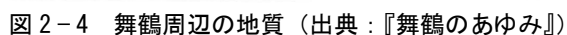


図 2-2 舞鶴市の標高区分

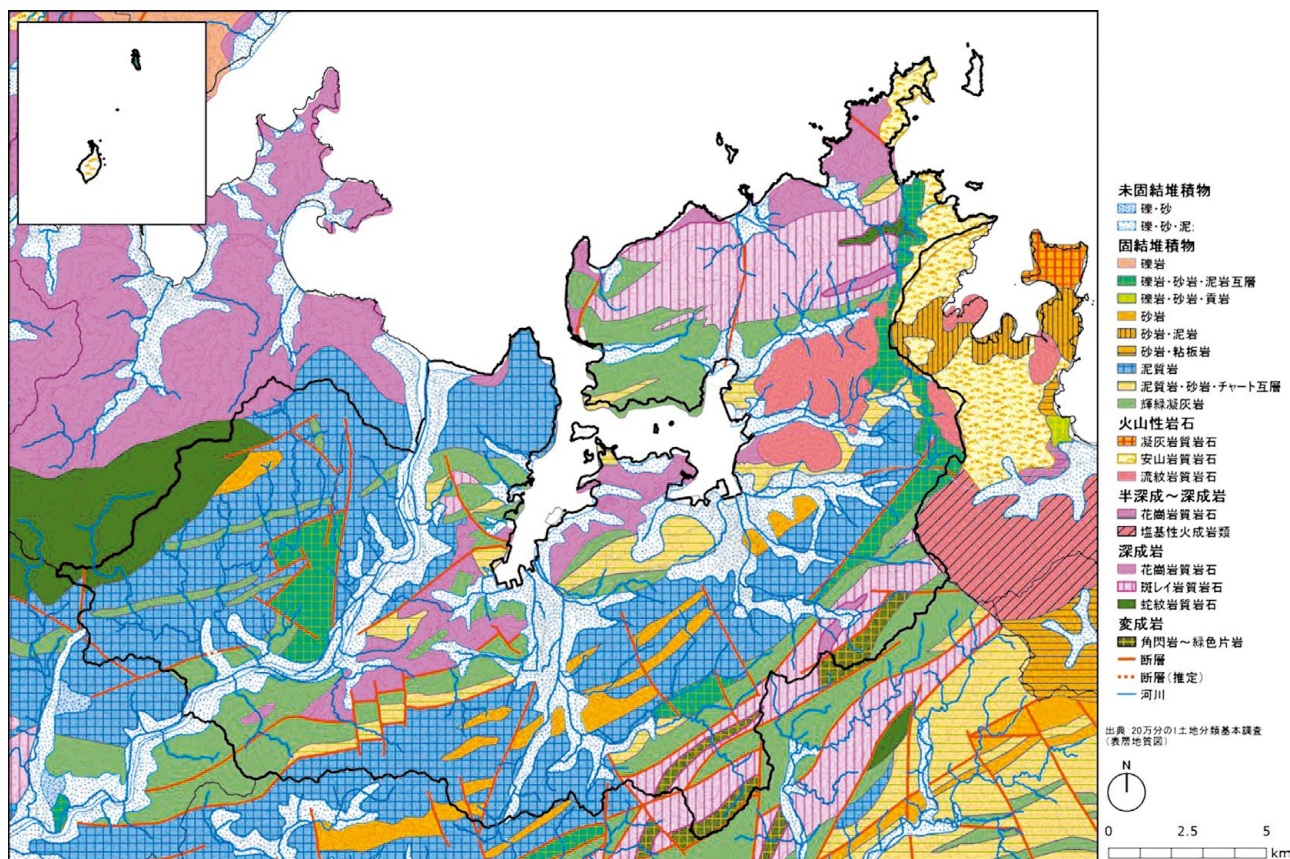
山々に囲まれた平地部には、主に農地が広がり、河川や古くからの道筋に沿って農村集落が点在しているほか、若狭湾に面して、成生^{なりゅう}などの美しい漁村集落が点在する。



舞鶴市は西日本を北東から南西に貫く「舞鶴帯」の端部に位置する。舞鶴帯は、古生代の終わりに、海が北方から次第に陸化しはじめた際の海と陸の境目にあり、活発な地殻変動により、舞鶴層群、志高層群、荒倉層群、難波江層群、内浦層群など、古生代から新生代にわたる化石が分布する地域となった。このうち、志高層群は2億年前にできた日本最古の石炭層であり、漣痕化石れんこんと呼ばれるリップルマーク（波の化石）もみることができる。また荒倉層群からは、アンモナイトや二枚貝、巻貝の化石が出土する。



新生代になると、現在の日本海側を中心に大陥没が生じて日本海が生まれたが、冠島にみられる1500万年前のタブヤニレ、ハンノキなどの広葉樹の化石はこの頃の陥没でできた湖の底に堆積したものであるといわれている。約1500万年前の新生代第三紀中新世に生息していたビカリアの化石は内浦層群から出土し、このことから、当時の舞鶴は亜熱帯気候であったとされている。約1000万年前には、青葉山の近くで海底火山が爆発した。現在の青葉山は溶岩ドームのように盛り上がってできたもので、麓の溶岩塊は往時の姿を見せているものである。また、この頃に若狭湾一帯が沈降して、リアス式の美しい舞鶴湾の海岸線が誕生した。



また、舞鶴市の土壌分類についてみると、山地部は乾性褐色森林土が発達しており、河川流域にはグライ土や灰色低地土壌が分布している。さらに舞鶴湾を取り囲むように、赤色土壌が分布していることが特徴である。

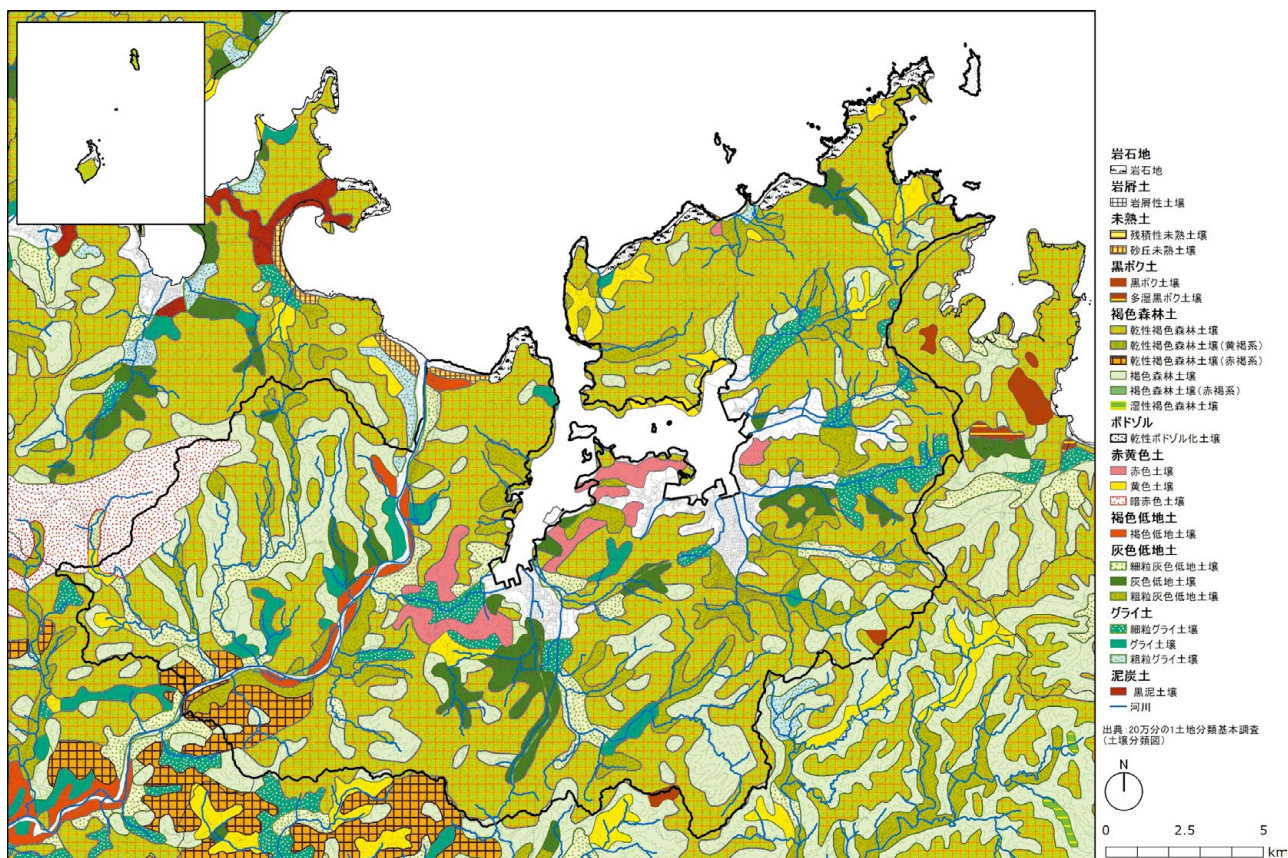


図 2-6 舞鶴市の土壌分布図

ウ. 気候

舞鶴市は日本海側気候のなかでも山陰区に属しているため、春は乾燥した南よりの風が吹き降ろすフェーン現象が起こりやすく、夏は概ね高温多湿で晴天の日が続く。

冬は北西の季節風が吹き、雨や雪の日が多い典型的な日本海側気候を呈している。

年平均気温14.5℃程度と比較的冷涼であるが、夏季は最高気温30度を超え、冬季は最低気温が0度以下になるときもある。

年降水量は、1,826mm前後であるが、12月、1月、2月は積雪がみられ、豪雪地帯に指定されている。

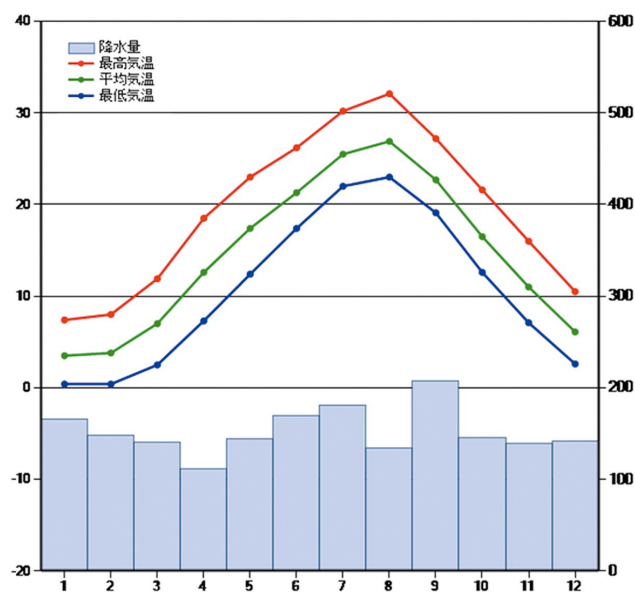


図 2-7 舞鶴市の年降水量と気温分布図
(出典：気象庁データ)

エ. 生態系

舞鶴市の植生区分をみると、ブナクラス域の自然植生であるチャボガヤークヤキ群集が小規模に分布するほか、山地部はブナクラス代償植生であるユキグニツバキーコナラ群集が広くみられる。また、小規模ではあるが、ヤブツバキクラス域の自然植生であるヤブコウジースダジイ群集もみることができる。このように、舞鶴市の植生は、多様性に富んでいる。

また市域には、高山はみられないものの、孤立の山塊である青葉山の植生が特筆される。

青葉山は安山岩上に特異な高山植物や希少植物が自生しているほか、若狭湾地帯で唯一植物の垂直分布(二次林ーミズナラ帯ーブナ帯)がみられる。さらに冠島では暖流の影響を受けて暖地性植物樹林がみられるほか、神崎海岸などにはハマナスなどの海浜植物が生育するなど、市域は特色のある植物相を呈している。

また、冠島はオオミズナギドリの繁殖地として国の天然記念物に指定され、沓島はウミネコ、ヒメクロウミツバメの繁殖地として市の天然記念物に指定されている。また、地域を定めない特別天然記念物のオオサンショウウオやニホンカモシカも生息している。さらに、舞鶴湾とその付近は岩礁地帯、砂泥地、泥地、藻場などの多様な生活環境を反映して、約200種類の魚類が知られており、そのうち100種前後が通常舞鶴湾とその付近でみられるなど、動物相も多様である。

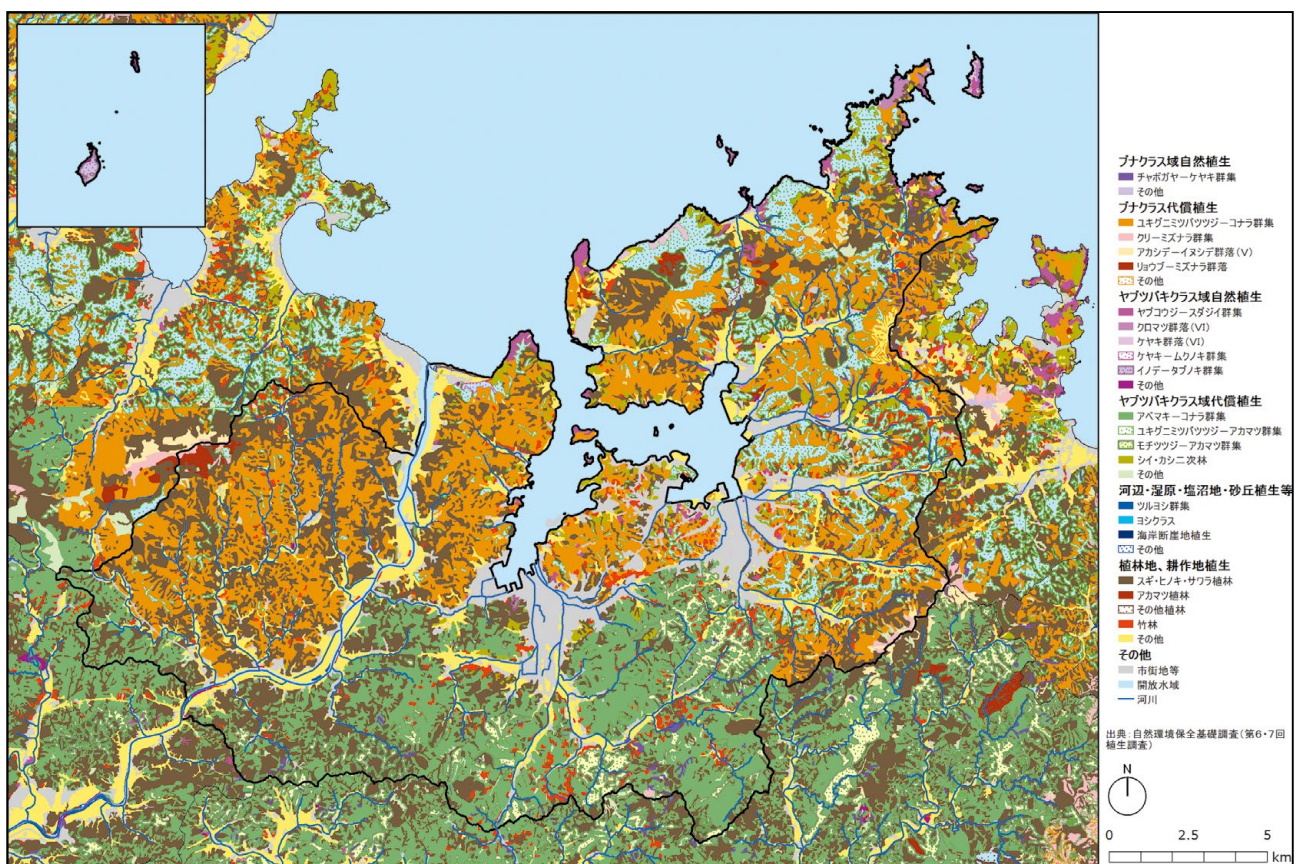


図2-8 舞鶴市の植生（出典：自然環境基礎調査第6回・7回）

また、桑飼下遺跡の古代植物の植生資料をみると、スギ属、ヒノキ科、イチイ科、コナラ亜属、アカガシ亜属が優占している。また、遺跡より採取した炭化材の分析資料によると、アカガシ亜属の常緑カシが多く、次にクリ、オニグルミ、ケヤキと続く。このことから、古代の舞鶴市は、現在よりも冷涼な気候であった時期があること、日本海の手侵の影響が古くからあったことが推測されている。

(2) 社会環境

ア. 人口・世帯等

舞鶴市の総人口は、昭和22年(1947)の92,139人(国勢調査)以降、昭和34年(1959)の103,137人(推計人口)をピークに、平成20年(2008)の90,001人(推計人口)まで、9万人台を維持し、推移してきた。昭和40年(1965)以降、平成16年(2004)まで、対前年増減比率±1.0%以内と微増減の範囲で推移している。

平成16年(2004)以降、自然減に転じ、平成12年(2000)以降は、5年間で約3,000人ずつ減少する状態が続いており、平成27年(2015)以降においても同様の減少が続く推計となっている。戦前の人口増減の主たる要因は、大正10年(1921)のワシントン軍縮会議にともなう海軍鎮守府の廃止・要港部への転換、海軍工廠の工作部格下げによる人員整理による人口減少、昭和11年(1936)の工作部の海軍工廠昇格、昭和14年(1939)の要港部の鎮守府昇格による人員増等にもともなう人口増加である。

年齢別人口比較をみると、生産年齢人口(15～64歳)は、平成7年(1995)まで35年間にわたり、6万人台を維持しているが、平成12年(2000)から、平成22年(2010)の10年間で、約6,700人(約-11.2%)大きく減少している。年少人口(0～14歳)は、昭和40年(1965)から昭和60年(1985)まで、2万人台を維持していたが、平成2年(1990)に17,519人と大きく減少し、以降、現在まで減少傾向が続いている。一方、老年人口(65歳以上)は、昭和50年(1975)までは1万人未満で推移してきたが、上昇傾向は続き、平成12年(2000)に2万人台に入り、平成22年(2010)には23,181人となっている。将来推計においては、平成27年(2015)(25,428人)をピークに微減傾向に移行する推計となっている。

自然増減についてみると、いわゆる第2次ベビーブーム(昭和47年(1972)～昭和49年(1974))において、昭和48年(1973)に最大1,090人の自然増加を記録して以降、減少傾向に移る。

平成16年(2004)に自然減に移行してからは、減少数100～200人/年台で推移してきたが、近年、300人/年を超える減少数となっている。

社会増減についてみると、本市には、大学がないため、進学にともなう転出があることに加え、海上保安庁、海上保安学校、海上自衛隊、舞鶴高専等が所在していることにともない、転出入数が多いという特徴がある。

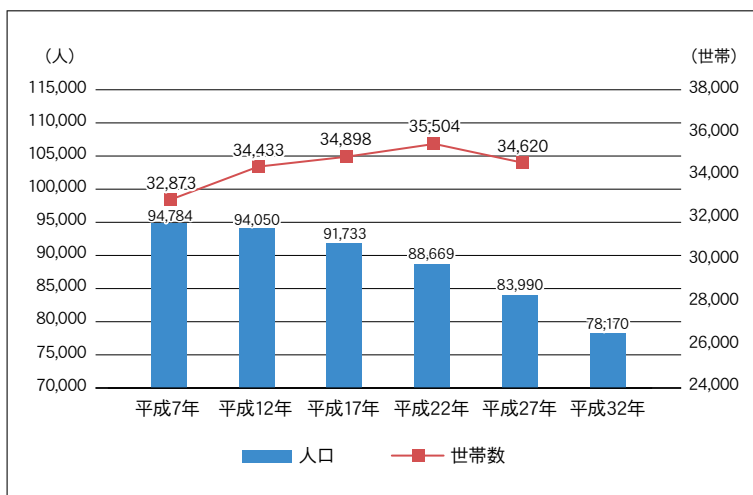


図2-9 舞鶴市の人口・世帯数の推移

(出典：国勢調査／国立社会保障・人口問題研究所)

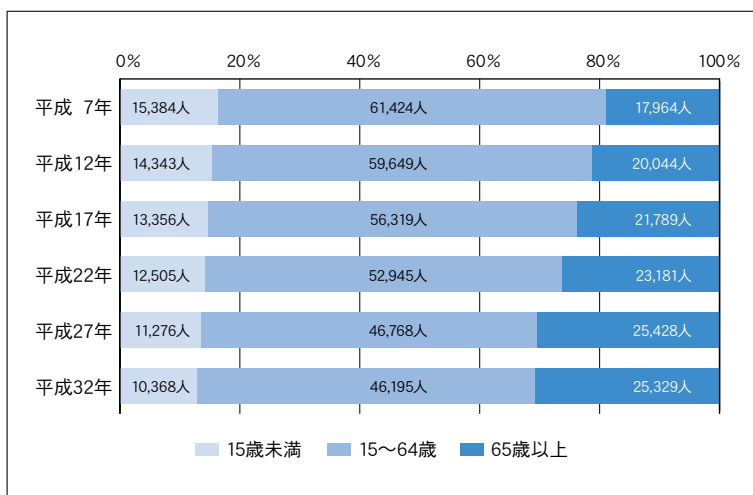


図2-10 舞鶴市の年齢別人口比較の推移

(出典：国勢調査／国立社会保障・人口問題研究所)

イ. 行政単位の変遷と東西の市街地

江戸時代、田辺藩として統治されていた地域は、明治維新後、まず舞鶴藩に、明治4年(1871)7月廃藩置県により舞鶴県となり、さらに11月には豊岡県に統合され、明治9年(1876)には京都府に編入された。この頃の人口は現舞鶴市域で約41,000人であった。「舞鶴」という地名は、明治2年(1869)の版籍奉還後、太政官により「田辺」の地名は山城や紀伊にもあることから、改名するように命令があり、田辺城の別名であった「舞鶴城」から「舞鶴」という地名が生まれた。



図2-11 復元された田辺城の隅櫓

日本の近代化にともない、政府は清国、ロシアを意識した軍備の増強に努め、明治19年(1886)、海軍当局は舞鶴湾の測量と視察をおこない、明治22年(1889)、第4海軍区^{あまるべ}の中心となる海軍鎮守府を舞鶴に設置することを決定し、明治34年(1901)余部下に鎮守府が開庁した。鎮守府は、戦艦三笠の他19隻の艦艇、海兵団、水雷団、海軍工廠、海軍病院などを有し、日本海側唯一の軍港として重要な軍事基地となった。同時に舞鶴は要塞地帯区域に指定され、住民の日常生活には様々な制限が加えられた。

江戸時代は、舞鶴湾を囲み、田辺藩の統治のもとで発展してきた舞鶴であるが、軍港設置により東地区と西地区はそれぞれ異なる都市として発展することとなった。

東・中地区は軍港設置にともない多くの海軍軍人、軍属、海軍工廠行員およびその家族が移住してきた。そのため、新たな住宅、商店、娯楽施設などが必要となり、明治36年(1903)には碁盤目状に東市街地が区画整理され、東西に走る道路に三笠や富士などの明治時代の軍艦の名前がつけられて全国から商業者等が集まり、賑わいをみせた。



図2-12 東地区市街地の現状

一方、西地区は、商工業を中心とする産業港湾都市として港の修復をおこない、昭和時代には樺太、朝鮮、大連、天津、北海道間に定期航路をもつ商港となった。

明治22年(1889)の町村制施行により、現舞鶴市域は1町17か村の行政組織ができたが、鎮守府が開庁すると人口が増加して新舞鶴町、中舞鶴町が誕生し、昭和13年(1938)に周辺地域が吸収合併される形で東舞鶴市と舞鶴市が誕生し、現市域は2市8村となった。

第1次大戦後の大正12年(1923)、鎮守府が要港部に格下げとなったことで人口が約1割減少したが、昭和12年(1937)には舞鶴は再び鎮守府となり、海軍施設の拡張、海軍工廠の生産の拡大などにより、人口も回復した。その後、昭和18年(1943)に軍部の強い要請により東舞鶴市と舞鶴市が合併して舞鶴市が生まれた。

戦後、加佐地区は加佐町となっていたが、昭和32年(1957)に舞鶴市に編入され、現在の舞鶴市域が確定した。

明治以降にそれぞれ発展した東西市街地であるが、同一の市内に城下町と海軍施設をもち、大浦、由良川地域の自然などの歴史文化遺産を有する特色ある都市として現在に至っている。

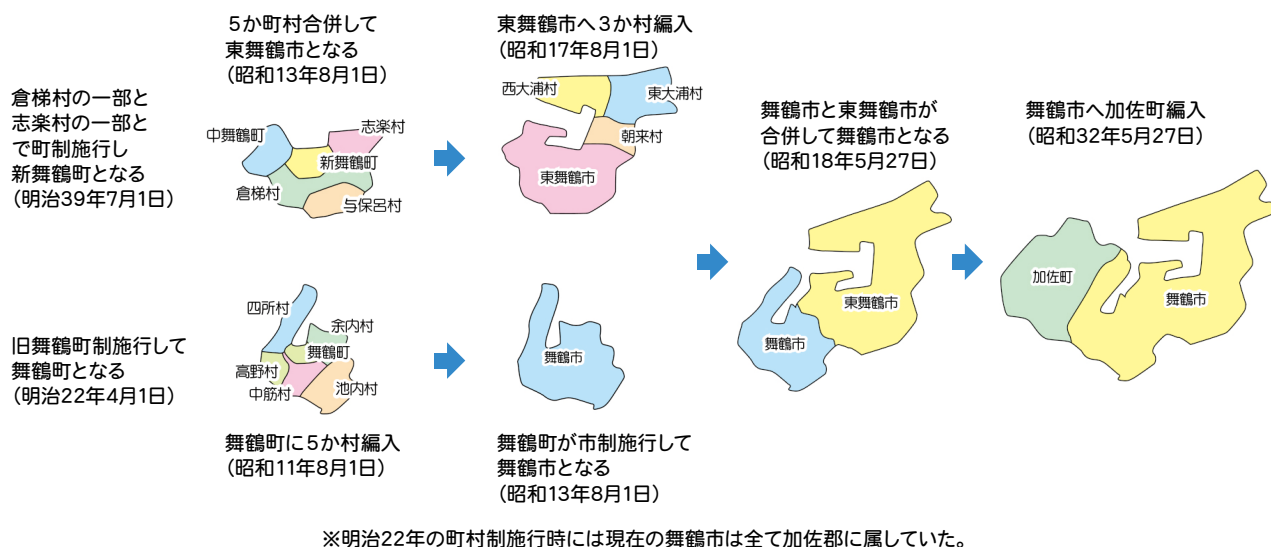


図 2-13 市域の変遷

ウ. 産業

産業別就業者比率の推移をみると、平成 7 年(1995)から第 3 次産業従事者が順次増加し、平成22年(2010)には72.4%となっている。一方、第 1 次産業従事者は順次減少し、同じく平成22年には4.2%となっている。

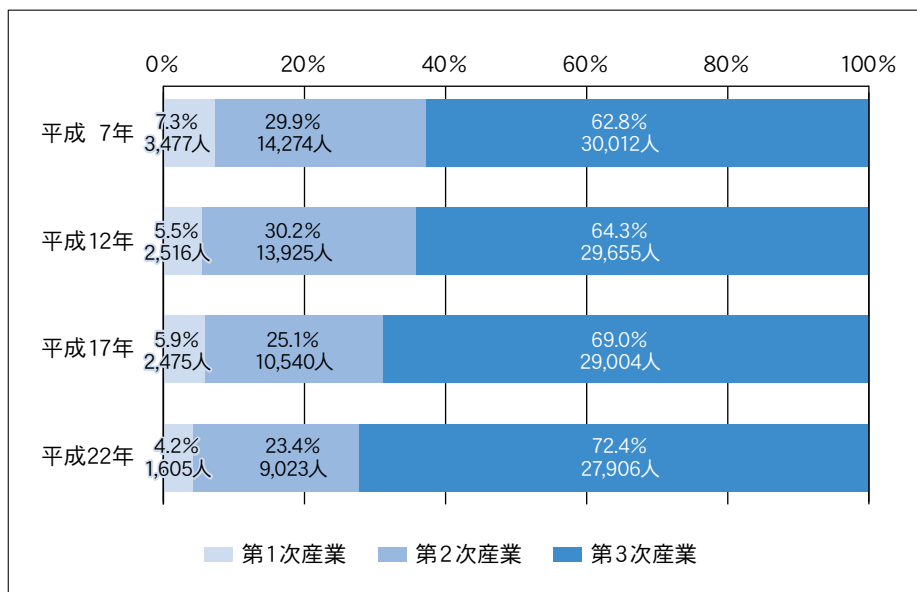


図 2-14 舞鶴市の産業別就業者数比率の推移（出典：国勢調査）

舞鶴市の産業別就業者数の状況を国勢調査からみると、「卸売業、小売業」に就業している者(6,055人)が最も多く(14%)、次いで「公務」(5,266人：13%)、「製造業」(5,259人：12%)、「医療、福祉」(4,652人：11%)となっている。男女別にみると、男性では、「公務」に就業している者が最も多く(18%)、次いで「製造業」(15%)、「建設業」(13%)、「卸売業、小売業」(11%)となっている。女性では、「医療、福祉」に就業している者が最も多く(22%)、次いで「卸売業、小売業」(19%)、「製造業」「飲食サービス業」(9%)となっている。舞鶴市の産業構造の特徴としては、「公務」が多いことが特徴である。

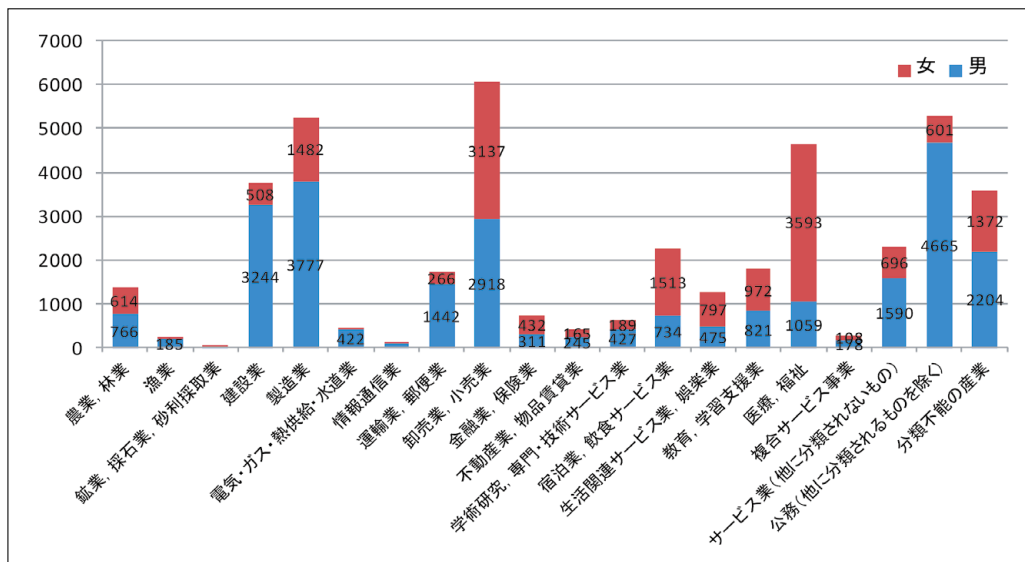


図 2-15 舞鶴市の産業別就業者数の状況（出典：舞鶴市人口ビジョン）

また、経済センサスにおける事業所就業実態からみる産業別就業者数の状況では、「卸売業、小売業」の就業者数(7,719人)が最も多く(19%)、次いで「公務」(5,083人：13%)、「医療、福祉」(4,738人：12%)、「製造業」(4,535人：11%)となっている。国勢調査との対比でみると「卸売業、小売業」(+1,664人)、「宿泊業、飲食サービス業」(+1,432人)、「製造業」(-724人)、「建設業」(-628人)の差が大きく、昼間人口の流入・流出移動の要因のひとつと考えられている。

○農林水産業

農林水産業についてみると、舞鶴市は全般に平野に乏しく、耕地は狭い地域に限られているが、農林業就業者数は約2.7%(1,178人)となっている。また、豊かな海に恵まれている舞鶴市にあっても、漁業就業者数は0.4%(1,850人)となっている。しかし、農林水産業振興による経済規模の拡大を目指し、地域資源を活用した全国ブランドの創出や万願寺甘とうなどの特産農産物の生産振興、「魚の街まいづる」のイメージづくりと「舞鶴のさかな」のイメージアップなどを、総合計画後期実行計画のなかで新たな戦略として掲げている。

○観光

「まいづる観光ブランド戦略」に基づく、「赤れんが」と「海・港」を活かした魅力づくりを推進し、交流人口の拡大を目指し、体験的要素を取り入れたニューツーリズム事業の展開や、関西における日本海側の玄関口となる京都舞鶴港を活用した交流人口の拡大を目指したクルーズ客船の誘致や港湾用地等の利用促進などの港の賑わいの創出に向けて、取り組みを進めている。

平成26年(2014)の観光入込数は2,309,588人と平成25年(2013)と比較して479,008人増加しており、今後も海や山の自然、世界記憶遺産となった引揚記念館収蔵資料や赤れんが倉庫群をはじめとする日本遺産、城下町や漁村集落の景観、遺跡などの歴史文化遺産を効果的に活かし、周遊・滞留できる多様な魅力を兼ね備えた観光の継続が必要となっている。

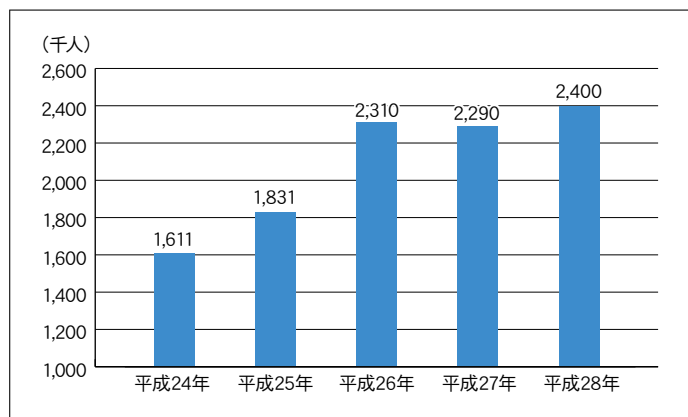


図 2-16 舞鶴市の観光客入込数

エ. 交通網

舞鶴市の交通網の整備は、明治時代に遡る。明治22年(1889)に鎮守府の置庁が決定すると、京阪神と舞鶴を結ぶ鉄道の設置が推進され、明治32年(1899)京都と園部間が開通し、同33年(1900)には福知山と大阪を結ぶ^{はんかく}阪鶴鉄道が開通した。さらに、明治37年(1904)には福知山と新舞鶴間が開通した。舞鶴駅からは港へ延びる海舞鶴線が敷設され、終着駅である海舞鶴駅から鉄道連絡船が出て、山陰や北陸の未開通部分を補った。同43年(1910)には園部と綾部間が開通した。また、その後、大正11年(1922)には小浜線が、大正13年(1924)には宮津線が開通した。さらに、昭和元年(1926)にはウラジオストックと舞鶴を結ぶ航路が開通し、舞鶴は人や物資が行き交う十字路となった。

現在、山陰線の綾部駅から西舞鶴駅・東舞鶴駅へ通じるＪＲ舞鶴線が南北に通じ、京阪神からのアクセスルートとなっている。さらに東舞鶴駅から東方面へはＪＲ小浜線が福井県敦賀市を結ぶルートになっている。また、京都丹後鉄道によって兵庫県豊岡市と結ばれている。現在、京都から西舞鶴、東舞鶴駅までは特急で約１時間40分、大阪からは京都駅経由で約２時間20分である。また、京都丹後鉄道宮舞線が宮津から西舞鶴までつながっており、所要時間は約30分である。

主要な幹線道路では、舞鶴若狭自動車道の舞鶴東ＩＣ、舞鶴西ＩＣが市域の南部を横断し、車両による東舞鶴、西舞鶴への玄関口となっている。高速道路を用いると、京都市より京都縦貫自動車道・綾部ＪＣＴから舞鶴若狭自動車道で約１時間10分、京阪神からは中国自動車道吉川ＪＣＴから舞鶴若狭自動車道で約１時間40分と良好なアクセス環境が整備されている。

また、ＪＲ小浜線と並行して東西方向には国道27号がはしり、舞鶴西地区で国道175号と接続する。

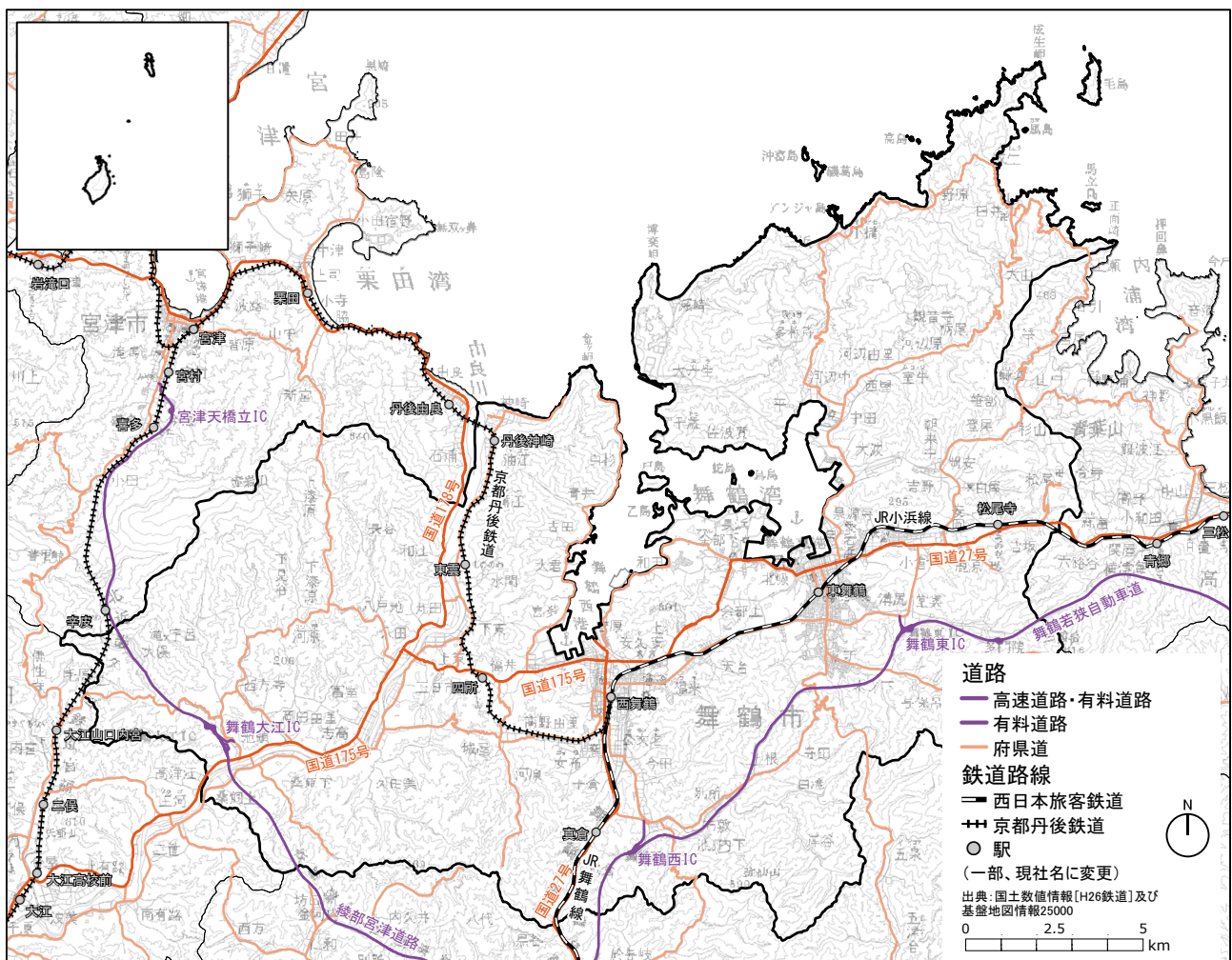


図 2-17 舞鶴市の交通網

オ．都市計画等

舞鶴市は、昭和34年(1959)に用途地域が定められ、昭和56年(1981)に市街化区域が設定され、西地区、東地区の市街地を中心に市街化区域が指定された。しかし、近年の人口減少や少子高齢社会、また産業構造等、社会情勢が変化しているなかにあつて、新たに都市を再構築するため、平成27年(2015)に都市計画の見直しをおこなった。

また、「地方拠点都市地域の整備及び産業業務施設の再配置の促進に関する法律」に基づき、平成5年(1993)に北近畿地域の「地方拠点都市地域」に指定され、福知山市とともに中心都市となっている。

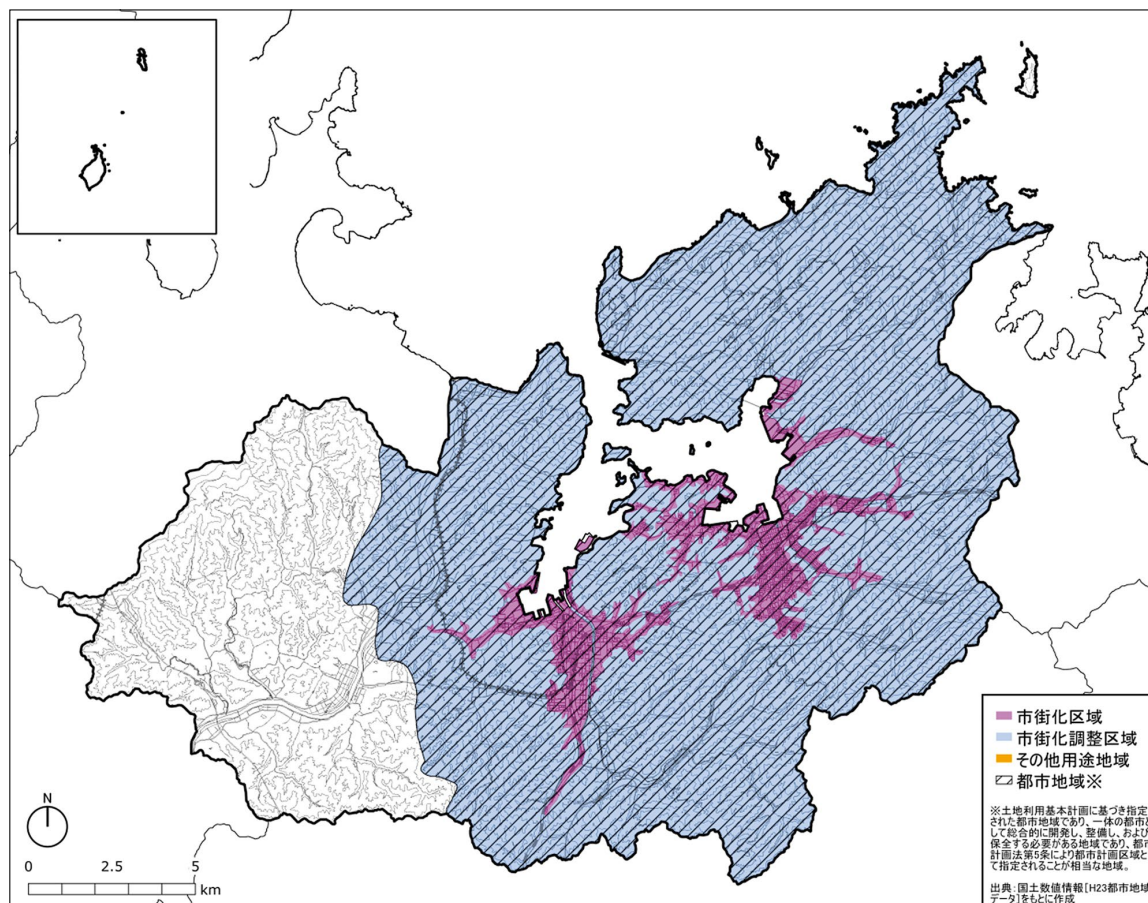


図2-18 都市計画法に基づく区域指定

また、昭和40年(1965)に舞鶴都市計画舞鶴港臨港地区に指定され、港湾法の規定により、昭和44年(1969)に商港区、工業港区、特殊物資港区が区分されている。

「農業振興地域の整備に関する法律」に基づく地域指定については、谷筋を中心に農業振興地域および農用地区域が指定されている。

森林についてみると、その大半が「森林法」に基づく地域森林計画対象民有林である。国有林は、面積が298haの大谷国有林他であり、市域に点在している。さらに、市域の森林はまとまった規模で保安林に指定されているが、成生・田井の森林は魚つき保安林に指定されており、舞鶴市の特徴となっている。

「自然公園法」に基づく自然公園は、冠島、杓島および大浦半島の海岸周辺が「若狭湾国定公園」に指定されており、「鳥獣保護法」による「鳥獣保護区」は舞鶴湾、冠島、杓島、毛島で指定されている。また、金剛院周辺は、「金剛院京都府歴史的な自然環境保全地域」に指定されている。

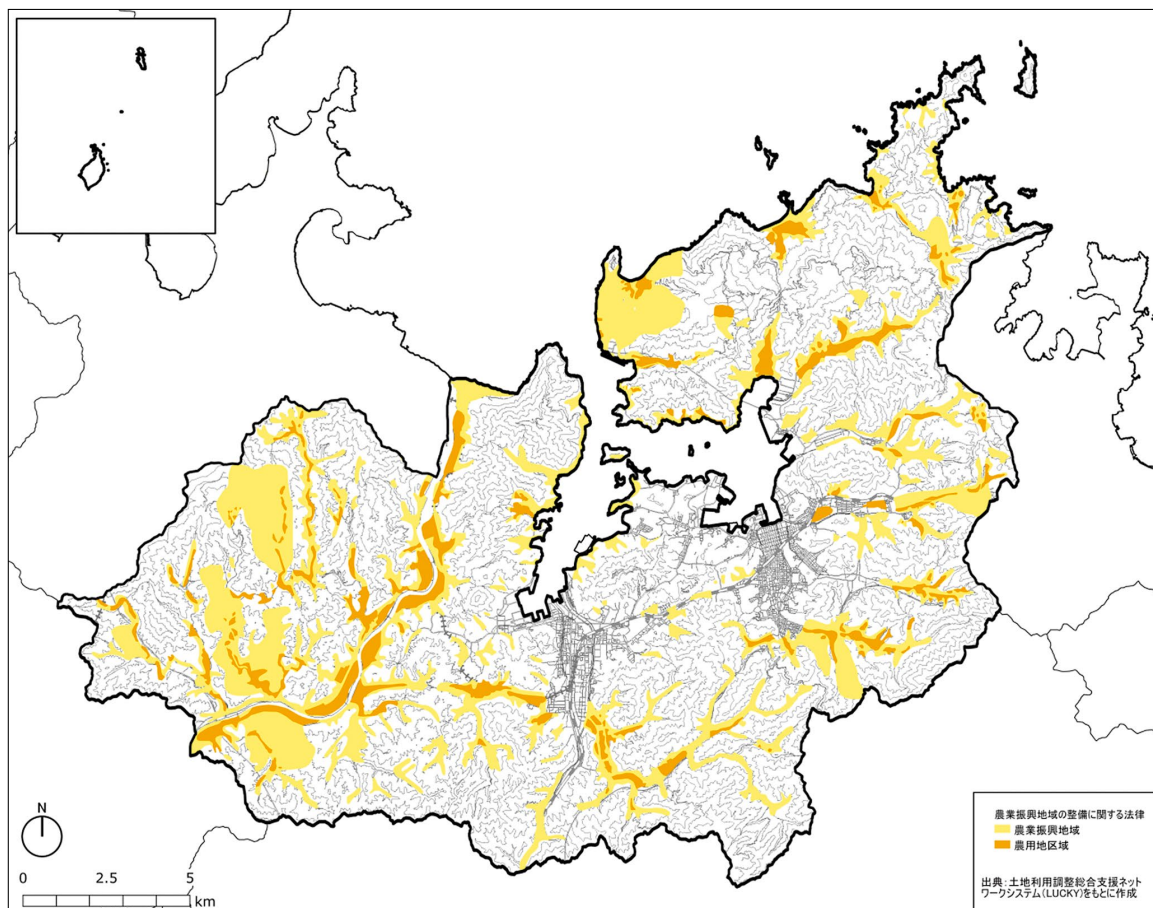


図 2-19 農業振興地域の整備に関する法律及び森林法に基づく区域指定

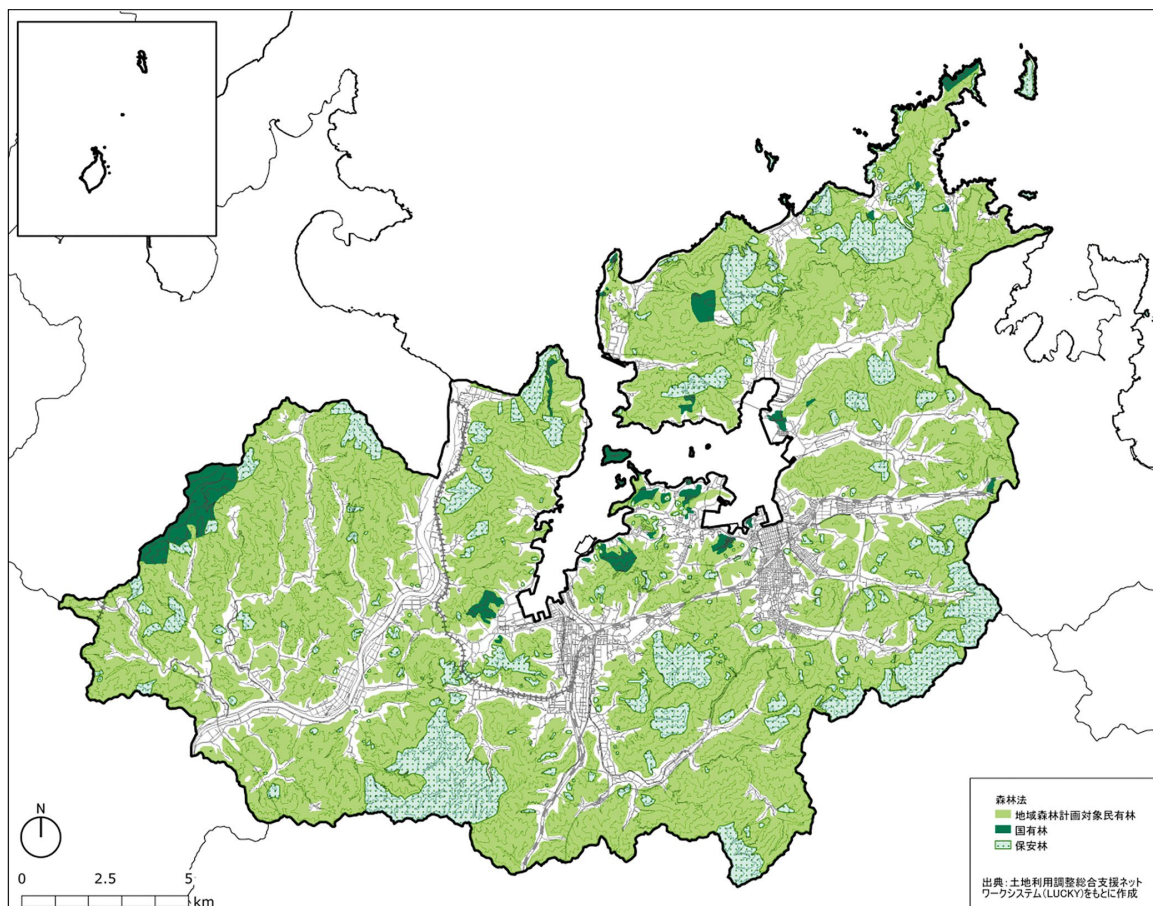


図 2-20 森林法に基づく区域指定

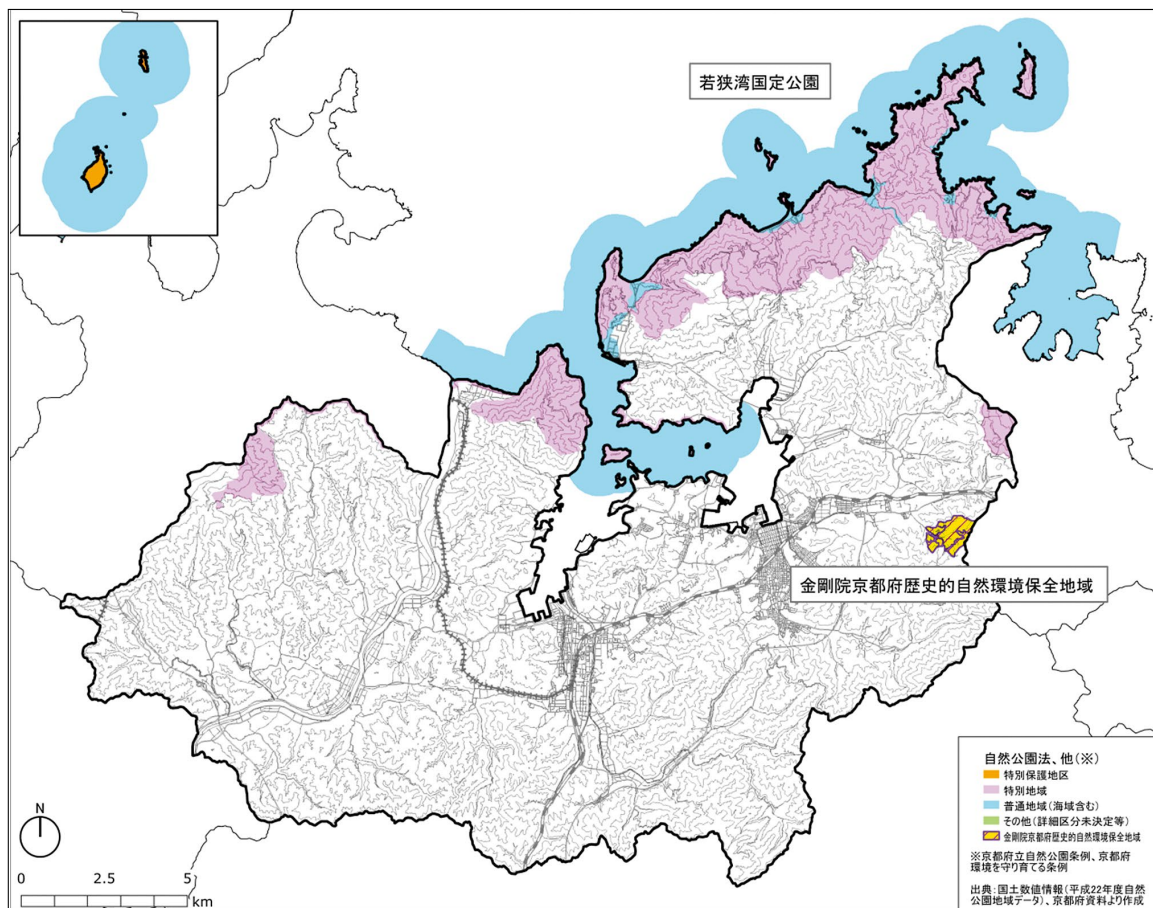


図 2-21 自然公園法に基づく区域指定

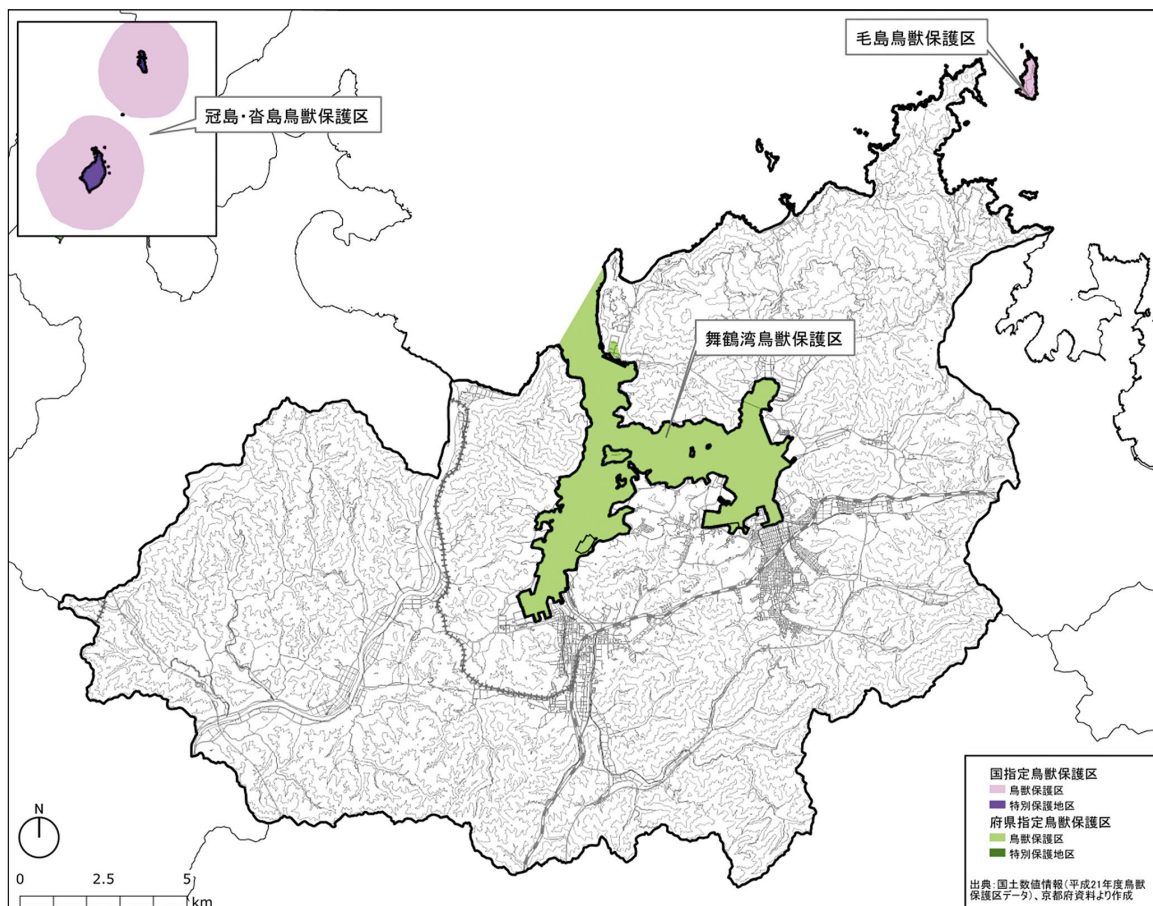


図 2-22 鳥獣保護法に基づく区域指定

さらに、自然環境保全基礎調査による巨樹、巨木の分布をみると、下記のようにタブノキ、ケヤキ、スダジイ、ムクノキ、スギ、モミなどが市内全域に分布している。

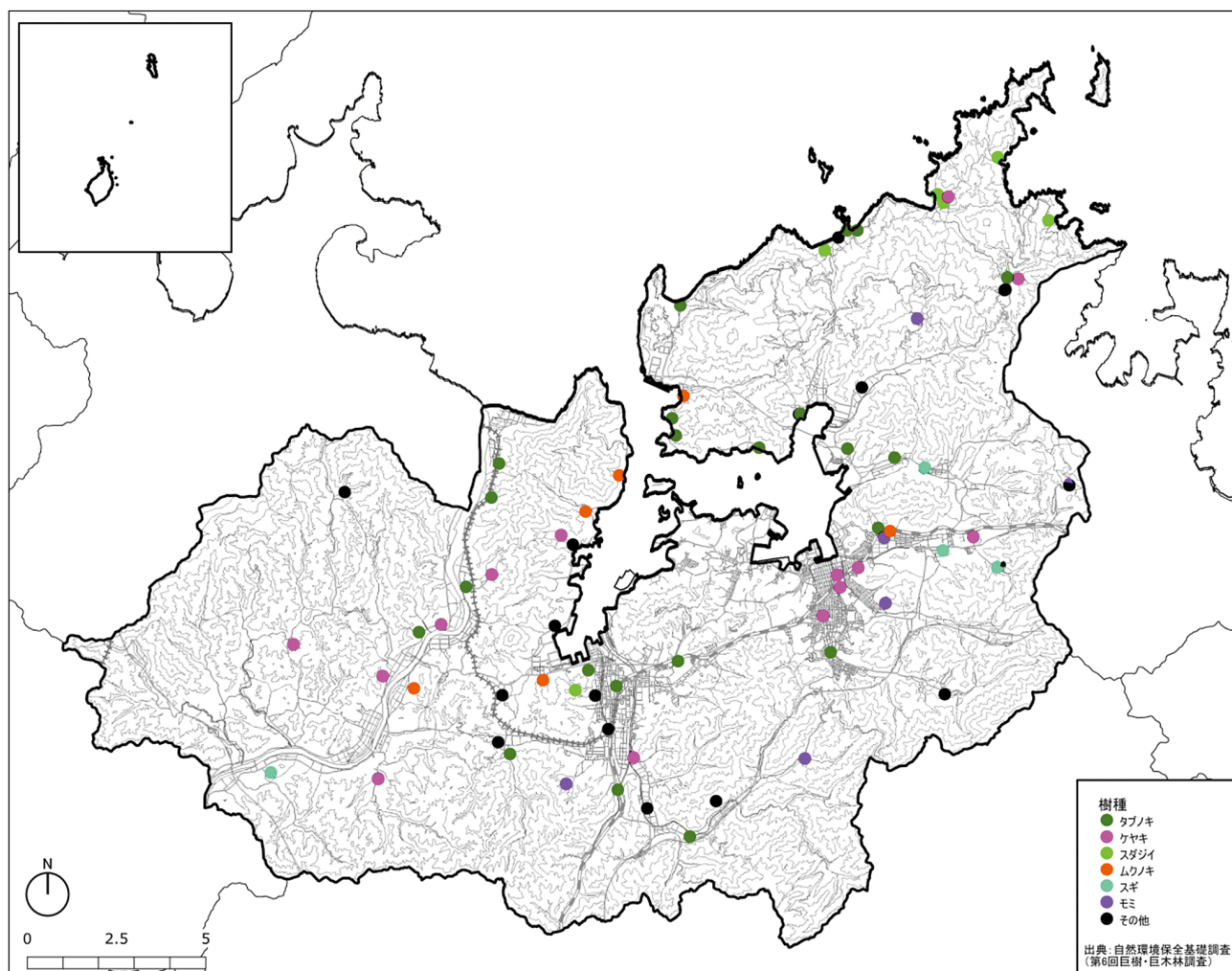


図 2-23 巨樹・巨木の分布

なお、本市域の一部は、「山村振興法」に基づく「振興山村地域」に指定されているほか、「特定農山村地域における農林業等の活性化のための基盤整備の促進に関する法律」に基づく「特定農山村地域」に指定されている。